

ギリシアの初期鉄器時代に関する時代名称と編年体系

高橋 裕子

The Historiography of Periodization Terminology and the Chronology of Early Iron Age Greece

TAKAHASHI Yuko

The study of Early Iron Age Greece is a developing field in Japan and there is the imminent need to establish the basic knowledge in this field in the Japanese language. This paper focuses on the two key aspects of the foundation for the field: the historiography of names and the chronology of the Early Iron Age. The first part of my paper, much indebted to A. Kotsonas' article (*AJA* 120, 2016, 239-270), discusses the history of the various names that have been used for this specific period in the early history of Greece, such as the Greek Middle Ages, the Heroic Age and the Dark Age(s). The second part deals with the chronology and reviews the pottery from Athens from the Submycenaean to the Late Geometric periods.

はじめに

2016年に上野の東京国立博物館にて開催された「古代ギリシャー時空を超えた旅」は、ギリシアの博物館が収蔵する多数の遺物が展示された大規模な特別展であった。以前にギリシアの博物館で見たことがある展示品であっても格段に見栄えが良く、ライティングを含めた展示技術の秀逸性がうかがわれる内容であった。

ただし筆者の専門である初期鉄器時代に関して焦点を絞るのであるならば、展示数が多くないにもかかわらず問題点が散見され、遺憾としか言いようがない¹。何よりも大きな問題として感じたことは、時代名称と土器の編年区分との区別がなされていないということである。たとえば土器の編年区分である亜ミケーネ期が、図録の年表では「亜ミュケナイ時代」となっていて時代名称と

して扱われている²。亜ミケーネ期は土器の編年区分としても独立した時期として扱うか否か議論があるほどであり、後期青銅器時代に続く時代区分として扱うことは到底不可能である³。さらに、やはり土器の編年区分である中期幾何学文様期や後期幾何学文様期が、やはり「時代」として記載されている箇所がある⁴。

このように時代名称と土器の編年区分とを混同するような問題が生じるということは、我が国における当該期の研究レベルがいかほどのものであるかということをも端的に示していると言えよう。そこで本稿においては、初期鉄器時代に関する時代名称と土器の編年体系に焦点を当てて、若干の事柄を記していきたい。

第1章 初期鉄器時代に関する時代名称

(1) 時代名称の研究

古代ギリシアの前11～8世紀前後は、現在では初期鉄器時代（Early Iron Age）という名称で区分されている。鉄が本格的に使用されるようになった最初の時期という意味であり、青銅器時代の中でも最後の後期青銅器時代に続く時代名称として定着している。青銅器時代のあとに初期鉄器時代（もしくは鉄器時代）という名称の時代区分を設けている地域や場所は地中海周辺各地に存在するが、ギリシアもその例に漏れない⁵。

一方で、かつて主流であった暗黒時代（Dark Age / Dark Ages）という用語は今や完全に支持を失っており、少なくとも専門家の間では、近年ではほとんど使用されることはない。また暗黒時代以外にも、初期鉄器時代に関しては19世紀以来複数の名称が使用されてきた。そしてそれらの用語の盛衰とその時々の研究状況との間には、密接な関連が存在する。そのため、たとえばIモリスの業績に代表されるように、時代名称自体がかねてより注目の的とされてきた⁶。

そして2016年に、アメリカの考古学関連の著名な学術誌（*American Journal of Archaeology*）にこの時代の名称に関する秀逸な論文が発表され、より大きな注目が集まることとなった⁷。この論文の著者のA.コツォナスは、エレウテルナに関する著作に代表されるようにクレタの初期鉄器時代（および前古典期）の業績で知られる考古学者であり⁸、当該期の研究分野において既にその評価を確立している人物である。上記の2016年の論文においても徹底した文献

渉獵に基づく研究史の丁寧な掌握や広範な知識に裏付けられた的確な指摘がなされており、時代名称の変遷とそれを促した背景が明らかにされている。

そこで本章においては、コツォナスやモリスの論考を主に参考にしながら、「ギリシアの中世」、英雄時代、暗黒時代などこの時代の名称に関する研究史をごく簡潔に紹介したい。その上で、初期鉄器時代という名称が定着したあとの「暗黒時代」という語の用法や問題点について言及していく。

(2) 「ギリシアの中世」と英雄時代

暗黒時代という名称が盛んに使用されるようになる以前は、初期鉄器時代に関しては「ギリシアの中世 (Greek Middle Ages)」や英雄時代 (Heroic Age) などの用語が使用されていた。そしてそれらの名称は、それぞれ固有の背景や概念、問題を有していた。

以下、最初に「ギリシアの中世」、そして次に英雄時代の順に見ていこう。

1. 「ギリシアの中世」

「ギリシアの中世」は、19世紀後期にドイツの研究者が使い始めた言葉である。暗く陰鬱な印象がヨーロッパ（特にドイツ）の中世世界と類似していると見なされ、用いられるようになった。しかしこの名称は概して好意的な評価は得られず、ほとんど普及しなかったと言っても過言ではない⁹。おそらくその理由の一端は、本来のギリシアの中世、つまり東ローマ帝国（ビザンツ帝国）の時代との混同が避けられないことにあるであろう。

広範に普及することはなかったが、しかし、この用語が当該期に「暗黒の時代」という印象を植え付けることになった。20世紀後半に圧倒的な優勢を誇った暗黒時代という用語の概念が、「ギリシアの中世」に起源を持つことを考慮するならば、その影響は小さくはなかったと言える¹⁰。例えば1963年に出版されたM.I.フィンリーの一般向けの著作の中で、この時代は暗黒時代として知られている中世のように「暗い」という記述がなされている¹¹。さらに20世紀終盤においてさえ暗黒時代に関して「ギリシアの中世」としても知られていると記載する概説書もあり¹²、研究史上この名称の存在は無視しえるものではない。

2. 英雄時代

英雄時代はホメロスの叙事詩との関連から名付けられた名称である。「ギリシアの中世」とは異なり、この用語はある程度の支持を獲得した。

ただし、周知のように、ホメロスの叙事詩が描く世界がいつの時代かという点に関しては大きな議論がある。とりわけ、H.シュリーマンが英雄時代をミケーネ時代と結びつけて考えたことは学界に大きな影響を与えた。英雄時代を、初期鉄器時代（暗黒時代）ではなく、後期青銅器時代（もしくはミケーネ時代）と見なす意見は、少なくとも一時期は圧倒的に優勢であった¹³。

このような意見がある中で、英雄時代と暗黒時代とを（ほぼ）同一視する傾向を強く促すことになった業績は、周知のように、1954年に初版が出版されたM.I.フィンリーの『オデュッセウスの世界 (*The World of Odysseus*)』である。同書においてフィンリーは、ホメロスの描く世界を前10～9世紀と見なしている¹⁴。すなわち、フィンリーが想定するホメロスの時代とは、暗黒時代の一部の時期であった。

この著作を通してフィンリーは暗黒時代という用語を積極的に使用しているわけではないが、ただし邦訳が出版された第二改訂版においては、補遺において暗黒時代の社会に関する言及がなされている¹⁵。さらに一般向けの他の概説書においては、暗黒時代とホメロスの世界との関係がより強調される記述がなされている¹⁶。これら一連のフィンリーの業績は、とりわけ専門家以外の読者に対して、英雄時代と暗黒時代とを同一視する傾向を強く促したと言えるであろう。

ところで本邦学界に目を転じるならば、英雄時代という用語を用いている文献として、太田秀通の『共同体と英雄時代の理論』が存在する¹⁷。1959年に初版が出版されており、フィンリーの『オデュッセウスの世界』と同時代の研究と見なして差しかえがない。同書において太田はホメロスに描かれている「英雄時代」の社会の分析を行い、そしてミケーネ時代および暗黒時代と比較している。ただし太田が使用している英雄時代という言葉はホメロスの作品が描写している「時代」のことであり、ミケーネ時代とも暗黒時代とも異なるものとして解釈している¹⁸。

このように英雄時代という言葉は研究者によりその意味するところに大きな隔たりがある上に、ホメロスの叙事詩が描く世界がどの時代を描写しているのかという問題に関しても未だに諸家の間で意見の一致がみられていない¹⁹。先述したように、ミケーネ時代や初期鉄器時代という意見があるほかに、特定の時代を反映してはいないという見解や²⁰、前古典期にまで時期を下げる説も存在する²¹。したがって、現在では英雄時代を初期鉄器時代と安易に同一視する研究者は皆無である。

さらに、初期鉄器時代の遺跡に関する発掘調査が増加し、考古資料が当該期の研究の中心となってきたことが、英雄時代の扱いに大きな変化をもたらすこととなった。ホメロスの叙事詩の世界を中核的な概念とする英雄時代という用語は文献史料の分野で扱うものであり、考古資料中心の初期鉄器時代研究とは一線を画すものと見なされるようになった。それはこの時代の研究がホメロスに大きく依存していたかつての手法から脱却し、大きく変化したことを物語っている。

現在に至るまで、初期鉄器時代の専門家がホメロスに大きな関心を抱いていることには変わりがない。代表的な例を記しておくならば、ホメロスと土器の図柄との関連に着目したA.M.スノッドグラスの著作が言及されよう²²。

また考古学者の業績も含まれているホメロス関連の論文集も断続的に発表されており²³、近年においては2017年に『考古学とホメロスの叙事詩 (*Archaeology and Homeric Epic*)』という著作が出版されている²⁴。そこには現在の初期鉄器時代研究において中核的存在の一人である、A.マザラキス・アイニアンも論考を発表している。氏の論文においては、英雄(半神)を祀る聖域や墓所祭祀(Tomb Cults)、前8世紀における土器の図像表現の復活など考古資料の検討により得られる知見と、ホメロスの叙事詩との関係が論じられている。その結果、マザラキス・アイニアンは初期鉄器時代を通じて口承で伝えられたホメロスの叙事詩がかかる現象と無関係ではないと推察しており、さらにはポリス成立期における社会の変化にも影響を与えた可能性を指摘している²⁵。

このように、初期鉄器時代を専門とする研究者がホメロスの叙事詩を今でも重視していることには疑念の余地がない。ただし、あくまでも考古資料を独立した研究対象として分析した上で、ホメロスの記述を参照したり、またはそれとの整合性を確認したりするという手法が主流である。英雄時代という用語が普及していた頃のように、ホメロスの方が中心的存在で考古資料が従属的立場にあるような研究が手がけられることはもはやない。

これらのことから察せられるように、英雄時代という言葉が暗黒時代ないしは初期鉄器時代と同一に扱われるようなことは完全に過去のものとなった。

(3) 暗黒時代の隆盛

1960年代から70年代になると、英雄時代と入れ替わるかのように、暗黒時代という名称が一気に優勢を誇るようになっていく。それまで繰り広げられてきた英雄時代と暗黒時代との「闘争」は、暗黒時代の完全な勝利に終わった²⁶。

そしてそれに付随して、華やかなミケーネ文化が崩壊したあとの闇に包まれた時代という印象がより強調されるようになった。

暗黒時代という用語の使用は、少なくとも20世紀の初頭にまで遡ることが確認されている。そしてそれは先に紹介した「ギリシアの中世」の概念を継承するものであり、ヨーロッパの中世のように暗黒の時代という意味が込められた名称であった²⁷。さらにその後、貧困で不安定な暗黒時代から抜け出して社会が大きく変化することに対して「ギリシアのルネッサンス」という表現も導入され、暗黒時代と「ギリシアのルネッサンス」というセットができあがる²⁸。

それ以降しばらく暗黒時代という用語が顕著な注目を集めることはなかったが、1961年に出版されたC.G.スターの『ギリシア文明の起源—前1100-650年 (*The Origins of Greek Civilization: 1100-650 B.C.*)』により、大きな転換点を迎えることとなった。この著作では、第I部の第2章においてミケーネ文化とその崩壊が扱われたあと、第II部で三つの章(第3～5章)にわたって暗黒時代が取り上げられている。そしてそこでは、叙事詩や伝承よりも、むしろ土器など考古資料を中心にこの時代の社会を描き出そうという努力がなされている。一般読者をも対象とした業績であるため、「暗黒時代」という題を持つ第II部に百頁以上が費やされていることは、かかる概念が世間一般に広く普及することに大きな影響を与えた²⁹。

この著作は、その後出版された初期鉄器時代(暗黒時代)に関する概説書では取り上げられることがほとんどなかったために、比較的最近に至るまで存在自体が看過ないしは無視されていたようにも見えるが³⁰、近年では研究史上の価値を評価する傾向が強い³¹。また専門家のみならず一般読者にも広く受け入れられたことは、30年後に再刷されていることから察せられよう。このように本書が認められたことにより、そこで扱われた暗黒時代にも高い関心が向けられるようになり、それが1970年代における目覚ましい飛躍への橋渡しとなった。

その1970年代こそ、暗黒時代研究が長足の進歩を遂げ、この時代が古代ギリシア史研究における重要テーマとしての地位を獲得した時期に当たる。それに伴って、暗黒時代という名称はより広く人口に膾炙することとなった。それをもたらしたのは、邦語では『ギリシアの暗黒時代』という訳になる二冊の著作、すなわちA.M.スノッドグラスの*The Dark Age of Greece*とV.R.d'A.デズボロの*The Greek Dark Ages*である³²。扱う時期や資料などにそれぞれ固有の特徴があり、タイトルが類似しているわりには内容に大きな隔たりが認められる両

者ではあるが、ともあれ暗黒時代という用語が使われた専門性の高い良質の概説書が相次いで出版されたことにより、当該期の研究は急速に進歩した。

このスノッドグラスとデズボロ、さらに『幾何学文様期のギリシア (*Geometric Greece*)』を出版したJ.N.コールドストリームを加えた三名が³³、20世紀後半の暗黒時代研究を牽引していくこととなる。デズボロは初期鉄器時代でも前半期(とりわけその土器)、コールドストリームは幾何学文様期(初期鉄器時代後半)の土器、スノッドグラスは金属器や通時的な社会変動など、各々が独自の研究スタイルや得意分野を持ちながらも相互に刺激を与えることにより、暗黒時代研究はかつてない活況を呈していった³⁴。現在の初期鉄器時代研究の礎が築かれたのは、この時期のことである。

上記三名の内デズボロとコールドストリームに関しては、次章にて再度言及することになる。残るスノッドグラスであるが、ケンブリッジ大学で長らく教鞭をとり、その指導を受けた学生たちによって「スノッドグラス学派(Snodgrass School)」が形成されていった³⁵。圧倒的な知識量のみならず、当時の研究状況からすれば先進的な趣向を持つ業績を発表し、J.K.パパドプロスの表現によれば「ギリシアの暗黒時代の教祖 (the guru of the Greek Dark Age)」³⁶とも言われるほどの絶大な影響力を有した³⁷。

(4) 初期鉄器時代の時代へ

1970年代に飛躍的に発展した暗黒時代研究であるが、その頃が暗黒時代という名称の最盛期であり、その後比較的すぐに衰退が始まる。そして暗黒時代という用語の勢力が衰えるにつれて台頭してきたのが、初期鉄器時代という名称である。暗黒時代に代わって初期鉄器時代が優勢になっていく過程を、以下、簡単に見ていこう。

初期鉄器時代という名称は、暗黒時代の衰退に伴って新しく造られた言葉ではない。その歴史は意外にも古く、遅くとも既に1930年代には存在していた。一例をあげるならば、1934年に出版されたT.C.スキートの『考古学におけるドーリス人 (*The Dorians in Archaeology*)』においても使用されている³⁸。そして1930年代においては、この用語が時代名称として優勢であった³⁹。ところがその後、マケドニアなどギリシアでも周縁地域を除いて、初期鉄器時代という言葉は使われなくなっていく。先に紹介した英雄時代や暗黒時代という名称が普及していた時期においては、初期鉄器時代という名称は劣勢に立たされていた⁴⁰。

ギリシアの中核地域において初期鉄器時代（ないしは鉄器時代）という用語が書名として使用された最初の例は、コツォナスによれば1980年に出版されたエウボイア島のレフカンディの報告書第一巻であるという⁴¹。20世紀後半は当該期に関する研究の進展のみならず遺跡の発掘でも大きな成果が得られた時期であったが、レフカンディはその代表格であった⁴²。その報告書第一巻のタイトルに鉄器時代、また本文では早くも序文の最初の頁に初期鉄器時代という言葉が登場する⁴³。出版当時既にケンタウロス像の出土などで大きな注目を集めていたレフカンディの本報告が⁴⁴、(初期)鉄器時代という用語を選択した影響は甚大であった。これにより暗黒時代が優勢であった1970年代の傾向は、大きく揺るがされることとなった。

ただしレフカンディの関連業績においては、1980年よりも以前から(初期)鉄器時代という言葉が使用されている。たとえば1968年に発表された概報においては、暗黒時代と並んで、鉄器時代という用語が既に使用されており、1964年の発掘開始以降比較的早い時期から、調査チームにはこの名称に対して好意的な姿勢が存在したことがうかがわれる⁴⁵。事実レフカンディの出土資料は、暗黒の闇に包まれた時代など想定できないほど、質量ともに括目に値するものであった。それを考えれば報告書第一巻のタイトルに鉄器時代という言葉が使用されたことは、至極当然であったと言えよう。

レフカンディからはその後も地中海周辺地域との交流や接触を示唆する遺物が出土したり、それまで大型の建造物は存在しないと見なされていた初期鉄器時代でも前半期に属する全長50m前後の建物（ヘロオン）が発掘されたり、当時の学界の常識を覆すような目覚ましい資料が発見されていく。ヘロオンは1980年に試掘が、1981～1983年にかけて本調査が行われたが、発掘当初から多大な注目を集め、その後の時代像の変化を決定づけた。この大型建造物の発見によりレフカンディはますます著名となり、初期鉄器時代を代表する遺跡として君臨することとなった。

さらにギリシア各地の他の遺跡からも資料の発見や報告が相次ぎ、既に1980年代には「暗黒時代はもはや暗黒ではない」という意見がうかがわれるようになる⁴⁶。この1980年代が、暗黒時代から初期鉄器時代への移行に関する重要な転換点であった⁴⁷。それを裏づけるかのようになり、先述の通り「暗黒時代の教祖」とも称されたスノッドグラスでさえ、1980年代後半には初期鉄器時代という用語を使用するようになる⁴⁸。

ただはまだこの時期は、暗黒時代という名称もある程度は用いられていた。

たとえばアメリカ人考古学者W.D.E.クルソンは、1990年に発表された小冊子のタイトルに暗黒時代という用語を用いているのみならず⁴⁹、後に記すように（本章（6）編年区分としての暗黒時代）、編年区分としても暗黒時代という用語を使用している。また1991年に出版されたJ.ウィットリの業績においても、暗黒時代という名称が用いられている⁵⁰。ウィットリの著作は1986年にケンブリッジ大学に提出された博士論文をもとに執筆されているが、出版するに際しても初期鉄器時代という用語よりも暗黒時代の方を主に使用している。これらことから明らかなように、1980年代は暗黒時代と初期鉄器時代とが未だせめぎ合っていた時期と言えるであろう⁵¹。

両者の争いに決着がついたのが、1990年代、とりわけその後半である。この時期に初期鉄器時代という用語が広く普及していった一方で、暗黒時代という名称は徐々に使われなくなっていった。両者は必ずしも完全に同一の時期を指す言葉ではないと主張する研究者も存在するが⁵²、初期鉄器時代は暗黒時代に代わる時代名称として一般に認識されていく。そして21世紀に入ると、完全に初期鉄器時代の時代となり、暗黒時代の時代は幕を下した。

（5）21世紀における暗黒時代

本項においては、初期鉄器時代という名称が主流になった後、暗黒時代という用語はどのように扱われているのかという点について記していきたい。

1. カッコつきの「暗黒時代」

21世紀になっても、暗黒時代という用語が直ちに廃れたわけではない。たとえば2007年に出版されたJ.M.ホールの概説書においては、初期鉄器時代のみならず暗黒時代という用語も使用されている。特別な含意なく用いられており、しかも当該期を扱う第3～4章においてはかなりの頻度で登場する⁵³。

このような例も存在するが、しかし2000年代に入ってから暗黒時代という名称が使用される際には、何らかの特別の意味が込められている場合が多い。往々にして引用符が付されることも多く、たとえば2011年に発表された*The "Dark Ages" Revisited*がその代表例であろう⁵⁴。

この論文集は、その副題（*Acts of an International Symposium in Memory of William D.E.Coulson*）が示しているように、先にも言及した亡きW.D.E.クルソンに捧げられたものである。クルソンの業績の一つに、全部で23頁という小型であるにもかかわらず、頻繁に引用ないしは言及される『ギリシアの暗黒

時代 (*The Greek Dark Ages*)』という小冊子がある⁵⁵。2011年に出版された論文集は、明らかにクルソンのその業績のタイトルをもじって付けられたものであり、クルソンへの哀悼の念が込められている。

このように今世紀に入ってから暗黒時代という用語を使用する場合には、特別な意図や何らかの含意が存在することが多い⁵⁶。

2. ラングドンの著作の暗黒時代

2008年に出版されたS.ラングドンの*Art and Identity in Dark Age Greece, 1100-700 B.C.E.*⁵⁷は、21世紀に発表された業績の中で、書名に暗黒時代という用語が用いられている例外的存在である。初期鉄器時代の図像学的表現をポリスの成立に至る社会の変化や発展と結びつけて解釈し、従来にはない見解を提案したことにより、大きな反響を巻き起こした著作である。書名とは異なり本文中では初期鉄器時代という用語が使用されているため、おそらく著者には何らかの意図があってタイトルには暗黒時代という言葉が選択されたのではないかと筆者は推測していた。そしてそのように推量するには、それなりの理由があった。

ラングドンのこの研究の発端は、アメリカの博物館で開催された初期鉄器時代に関する特別展 (*From Pasture to Polis: Art in the Age of Homer*)⁵⁸の仕事に関わったことにある。北米の博物館が所蔵するこの時代の遺物100点前後を集めて企画されたこの特別展は、1993年から翌年にかけてアメリカを数か所巡回し、さらに関連のシンポジウムも催された。

そのシンポジウムにおける発表内容が1997年に出版され、その題が*New Light on a Dark Age: Exploring the Culture of Geometric Greece*⁵⁹であった。暗黒時代を照らし出す「新しい光」を強調するために、表紙の文字は“New Light”の部分だけが大きく印刷されている。当時既に初期鉄器時代という名称が勢力を増しつつあったが、この場合には「新しい光」と対比ないしは対立させるために意図的に暗黒時代が用いられたのであろう。

さらにラングドンはこの特別展の仕事をしている最中に、この時代に関する従来の社会像には女性の存在が欠けていることに気が付く。そしてそれがジェンダー研究の視点から初期鉄器時代の図像表現を読み解くことを促すきっかけとなり、2008年出版の上記の業績へと結実した。この著作には、それまでの研究では闇に葬られていた当該期の女性たちの存在を明るみに出すという意図がうかがわれる。さらにそのみならず、現代の女性研究者に対しても同様の姿

勢が察せられよう。というのも、本文では主に初期鉄器時代という用語が使用されているにも関わらず、著作冒頭において研究史の初期段階で活躍した（そしておそらく苦勞もしたであろう）女性研究者たちに敬意を表する箇所では「ギリシアの暗黒時代の偉大な女性たち」と暗黒時代という言葉が選択されており、著者の思い入れがにじみ出るような記述となっている⁶⁰。

このようなことから、書名 (*Art and Identity in Dark Age Greece, 1100-700 B.C.E*) に暗黒時代という言葉が使用されている背景には、何らかの特別な意図があると筆者は推測していた。そもそもラングドンは、暗黒時代という名称を使用する研究者も未だ多く存在した1989年において、既に初期鉄器時代という用語を使用した論文を発表している研究者である⁶¹。2008年に発表された著作において、明確な意図もなく暗黒時代という言葉を書名に選択するとは思われなかった。

本稿執筆に際してその点を著者に直接問い合わせたところ、ラングドン自身は書名に初期鉄器時代という言葉を選択していたという返答があった。出版社 (Cambridge University Press) の編集者の意向により、それが暗黒時代という言葉へと強制的に変更されたという。暗黒時代という言葉の方がより多くの読者をひきつけることができるであろうと出版社側が信じていたことが、最終的に上記のような題になった理由であった⁶²。

何らかの事情があることは察しがついたが、しかしその理由は筆者の推測とは異なり、ラングドンの特別な意図による選択ではなかった。21世紀に入ってから暗黒時代という言葉が使用される場合には、専門家以外の読者に対する販売戦略というような研究以外の要素も関わっているということであろう。

最後に、ラングドン自身は暗黒時代という用語に変更したことを常に後悔しているとも記されていたことに、言及しておきたい。タイトル中のわずか二つの語 (Dark Age) のために、圧倒的に肯定的な評価を獲得した自らの著作に対して、長年に渡って悔いる気持ちを抱いていることは遺憾なことであろう。ラングドンの後悔の念はもはや暗黒時代という言葉が、少なくとも専門家の間では、全く支持されてはいないことを痛感させると同時に、時代名称や用語の選択という問題が決して小さなものではないということを示唆している。

(6) 編年区分としての暗黒時代

今まで記してきた暗黒時代という用語は、時代名称としてのそれである。暗黒時代という言葉には、それ以外に土器の編年区分として使用された事例があ

る。現在この種の暗黒時代という用語は、時代名称以上に、問題視される傾向が強い⁶³。

初期鉄器時代に関する土器の編年体系に関しては次章にて扱うが、本項での関連からごく簡単に記しておく、この時代の土器の編年は一般に「・・・幾何学文様期」という名称で区分されている。その理由は、後期青銅器時代とは異なり、初期鉄器時代に入ると図柄が消滅し、同心（半）円や線、雷文（メアンダー模様）など幾何学文様が中心となるからである。

ところがこのような一般的な傾向とは異なり、「暗黒時代・・・期」という区分がなされた遺跡がある。メッセニアのニコリアという著名な遺跡で、メッセニア湾の北西側の海岸線から2 kmほど内陸に入ったところに位置している。ミネソタ大学のメッセニアに関する調査（Minnesota Messenia Expedition）の一環として1969～1975年にかけて発掘された結果、新石器時代以来の長期に渡る人的活動の痕跡が発見された。初期鉄器時代に関して焦点を絞るならば、埋葬資料のみならず幾つもの建造物が出土したことが注目的となった⁶⁴。この時代の建造物は現在でも数が多くなく、ましてや1970年代においては稀有な存在であり、当該期の集落の具体像を提供する事例として耳目を集めた。

このニコリアの報告書の内、1983年に刊行された第三巻に初期鉄器時代の遺物や遺構に関する詳細な報告が掲載されている。そこでは暗黒時代という用語が土器の編年区分としても用いられており、表1のような編年体系が組み立てられている。暗黒時代Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ期という最初の三つの時期は、ニコリアの土層に基づく独自の編年区分である。そのあとに他地域でも用いられる一般的な後期幾何学文様期という名称の時期区分が続いており、極めて独特な編年体系と言えよう⁶⁵。

表1 ニコリアにおける編年体系

編年区分	絶対年代
暗黒時代Ⅰ期	前1075-975年前後
暗黒時代Ⅱ期	前975-850年前後
暗黒時代Ⅱ-Ⅲ期にかけての移行期	前850-800年前後
暗黒時代Ⅲ期	前800-750年前後
後期幾何学文様期	前750-700年前後

ニコリアの発掘報告においては、概報以来⁶⁶、初期鉄器時代という用語よりも暗黒時代という言葉の方が圧倒的に多く使用されていた。ただしかかる時代名称としての用法のみならず、その上さらに土器の編年区分としてもその言葉が選択されたことは大いに問題であった。次章にて記すように、土器の編年区分は文字史料による年代決定が不可能な初期鉄器時代研究において資料分析の根幹をなすものであり、個々の遺跡において恣意的な名称や区分が設けられたり、時代名と混同しかねない用語が選択されたりすることは歓迎されない。ましてや時代名称としての暗黒時代はギリシア全域を対象としているのに対して、暗黒時代Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ期という名称はニコリアを中心に確立されたもので、この時代の研究の中核的存在であるアッティカやアルゴリスに関しては使用されないということでは、それが受け入れられなくても当然であろう。

このニコリアの調査で初期鉄器時代の土器を担当したクルソンは、元来はこの時代の専門家ではなく、この遺跡の発掘に関わったことにより当該期の資料の分析にも携わるようになった研究者である⁶⁷。おそらくそれが影響している可能性があるが、上記の通りクルソンの名称設定は初期鉄器時代に関する土器研究の蓄積および慣習からは逸脱した固有のものであった⁶⁸。そしてクルソンはそのような独自の見解を保持したまま、1980年代半ばから90年代にかけて、この時代の土器に関する業績を次々と発表していく。ニコリア以外のメッセニア、そしてラコニアやイタカなどの土器について、ニコリアでの知見をもとに著作や論文を世に問うていった⁶⁹。精力的な研究活動ではあったが、結果的に暗黒時代という用語を土器の編年区分として使用する彼の見解は、他の研究者の支持を獲得するには至らなかった⁷⁰。

クルソンの編年体系やその区分名称に対する批判は、暗黒時代という用語そのものが使用されなくなるにつれて、ますます厳しさを増していった。ただし支持されてはいなくても、未だにその影響は拭い去られてはいない。とりわけメッセニアに関しては、ニコリアの報告書での記載に対する言及を避けて通ることができず、クルソンが残した負の遺産が現在でも重くのしかかっているとさえよう⁷¹。

現在初期鉄器時代と呼ばれている時代に関しては、今までに色々な名称が提案されてきた。そして個々の名称の背景には、それぞれ固有の概念が存在した。また暗黒時代という用語は土器の編年区分としても使用され、混乱を巻き起こした。

初期鉄器時代という名称が普及した現在においてこの時代について業績を発表する場合には、それらの事柄を踏まえた上での記述が求められている。

第2章 土器の編年体系

(1) 土器の編年に関する研究

周知の通り考古学で扱う年代には数値で示される絶対年代と資料の前後関係を表す相対年代の二種類がある。そして両者に関する初期鉄器時代の研究状況は、対極的な様相を呈している。

1. 絶対年代

絶対年代に関しては、必ずしも十分に進展しているとは言い難い⁷²。この時代のギリシア世界には文字史料が存在しないため、それに依拠して考古資料の絶対年代を決定することは不可能である⁷³。そのため、文字史料から数値年代がある程度判明している周辺地域から出土するギリシアの土器などを手掛かりとして、絶対年代を推察する研究手法が伝統的に採用されてきた⁷⁴。かかる分析による伝統的数値年代を批判する研究も提出されたが、支持を獲得するには至っていない⁷⁵。

初期鉄器時代の絶対年代に関して現在何よりも求められているものは、炭素14年代測定法をはじめとする科学的な分析である。残念ながら当該期に関するこの種の研究は著しく遅れを取っているが、それでも徐々に試みられるようになっており、たとえばマケドニアのアシロスに関する研究などが言及されよう⁷⁶。さらにより注目されるどころでは、レフカンディ、カラポディ、コリントスという三つの著名遺跡の資料に関してAMS (Accelerator Mass Spectrometry、加速器質量分析) による測定が行われ、原幾何学文様期の開始を前11世紀後半とする結論が提出されている⁷⁷。

かかる科学的研究成果による絶対年代の確立は、初期鉄器時代に関して今後最も進展が期待される課題の一つである。

2. 相対年代

一方の相対年代に関しては豊富な研究の蓄積があり、土器の文様や器形に基づく詳細な編年体系が確立している。基本文献は、初期鉄器時代でも前半期に関するV.R.d'A.デズボロの『原幾何学文様期の土器 (*Protogeometric*

Pottery)』と、後半期に関するJ.N.コールドストリームの『ギリシアの幾何学文様期の土器 (*Greek Geometric Pottery*)』である⁷⁸。この二冊により初期鉄器時代の相対編年に関する基本的な枠組みが構築された。これらは今でも当該期の研究者にとって、バイブルとも言うべき存在である。

その後、たとえばアッティカにおける後期幾何学文様期II期の図像に焦点を当てたT.ロンボスの著作の様に⁷⁹、時期や地域など対象を絞った業績が発表されることにより、さらに研究が精緻化されていった。また重要資料が出土した遺跡の報告書が地域ごとの編年体系の確立に貴重な役割を果たしており、その種の著名な例としてはエウボイアのレフカンディ⁸⁰、ナクソス⁸¹、クレタのクノッス⁸²、カルキディケのトロネ⁸³などが言及されよう。

このように土器の編年研究に基づく相対年代に関しては、長年にわたって細部にいたるまで分析された十分な蓄積がある。そして初期鉄器時代の研究を志す者は、何よりもまず土器の編年体系に関する基礎知識を修得する必要がある。というのも土器に関しては金属器など他の資料に比べてはるかに緻密な編年が確立されているため、当該期における資料の年代決定に最も重要な役割を果たしているからである。そのため土器に対する基礎知識がないと、往々にして資料の前後関係さえ判断できない。

欧米の場合は、どのような分析手法を取る研究者であっても、土器に関する基礎知識がしっかりとしている。逆に本邦学界においては未だにそれがおろそかにされており、我が国においてこの時代の研究が本格的に進展しない原因ともなっている。

そこで本邦において初期鉄器時代研究が発展することを願いながら、以下、当該期の編年研究の中核を担うアテネの土器について概略を見ていこう。

(2) アテネの編年体系

アテネ中心部からは研究史の早い段階から初期鉄器時代の大規模な遺跡が発見され、それらの資料は編年体系の確立に主要な役割を果たしてきた。

とりわけ重要な遺跡は、ケラメイコスとアゴラである。アクロポリスに近い順に記すと、まずアゴラであるが、アクロポリスの北西側に位置しており、古典期には市民生活に重要な施設が設けられた場所である。初期鉄器時代においては土器の工房や墓域が存在していた⁸⁴。一方のケラメイコスは、アゴラからさらに北西方向に行った場所にあり、古典期には市壁および市門が建造された一帯である。ドイツの発掘により、初期鉄器時代の多数の墓が出土した。この

二遺跡から大量の資料が発見されたことが、アテネの編年体系の構築に何よりも大きな役割を果たした。

ケラメイコスやアゴラなどのアテネの土器は他地域に比べて変化が早く、また編年区分ごとの特徴がはっきりしていて把握しやすい。そのため詳細な相対編年を作り上げることが可能となった。さらに一度アテネの編年体系が確立してしまうと、アテネの土器が他地域から出土した場合にはそれがモノサシの役割を果たすため、その地域の編年体系構築に有益な情報を提供することとなった⁸⁵。このようなことから、初期鉄器時代の研究を志す者は、まずアテネの土器に関する基礎知識を修得することが肝要となる。

アテネの編年体系は（表2）、青銅器時代から初期鉄器時代への移行期とも言える亜ミケーネ期のあと、本格的な鉄器時代の開始を告げる原幾何学文様期とそれに続く幾何学文様期から構成されている。幾何学文様期は初期、中期、そして後期と三つに区分され、さらにそれぞれが細分化されている。

表2 初期鉄器時代のアテネにおける一般的な編年

前1100年前後	後期青銅器時代IIC期
	亜ミケーネ期
前1000年前後	原幾何学文様期
前900年前後	初期幾何学文様期
前800年前後	中期幾何学文様期
前700年前後	後期幾何学文様期

以下、編年区分ごとにその特徴を簡単に紹介していこう。

① 亜ミケーネ期

青銅器時代から初期鉄器時代への移行期に当たる亜ミケーネ期は、ミケーネ時代（または後期青銅器時代）の専門家からすれば最終地点であり、一方初期鉄器時代を研究する者からすればスタート地点に当たる。亜ミケーネ期をはさんで、それ以前のミケーネ土器（mycenaean pottery）とそれ以降の初期鉄器時代の土器とでは、その特徴が大きく異なる。そのためそれぞれの専門知識が通用せず、通時的な研究を阻む大きな要因となっている。

ところで亜ミケーネ期をめぐる大きな議論があり、独立した編年体系であるか否か疑問が呈されることもあった⁸⁶。現在ではひと昔前に比べるとギリシア各地でこの時期の資料が格段に増加し、また研究も進展してきている。とりわけ2007年にオーストリアで開催されたワークショップの内容がまとめられ、論文集が出版された意義は大きい⁸⁷。かかる研究の進展に伴い各地の遺跡で亜ミケーネ期を独立した編年として認める傾向が強まっているが、それでも地域によっては現在でも十分には資料が確認されていない場所も存在する。そのため亜ミケーネ期について何かを論じる際には、今以て慎重な姿勢が要求される。ただしアテネに関して言えばある程度の資料数が存在し、また独立した一つの時期区分として見なすことが通説として定着している⁸⁸。

アテネの亜ミケーネ期における土器の器形は、アンフォラ（図1.1）のような大きなものから小型のものまで様々である。小型のタイプでは、アンフォリスコス（小型のアンフォラ、図1.2、1.3）や鐘壺（取っ手の部分が鐘のような形をしている土器、図1.4、1.5）、レキュトス（口縁部または頸部から胴部にかけて垂直の取っ手が付いた土器、図1.6、1.7）などが一般的である。また往々にして整形が雑で、いびつな土器も存在する⁸⁹。

文様に関しては、後期青銅器時代IIIC期までのミケーネ土器には描かれていた花や鳥、タコなどの図像表現が姿を消したことが大きな特徴と言えよう⁹⁰。そしてコンパスを使用しない同心（半）円や直線、波線、格子模様などに、文様の種類が限定される。明らかに初期鉄器時代の幾何学文様への移行が進行しているが、ただし、亜ミケーネ期においては同心（半）円は未だコンパスが使用されておらず、フリーハンドで描かれるなど、後継の原幾何学文様期と比較すると違いは大きい⁹¹。



1.1 アンフォラ (28cm)



1.2 アンフォリスコス (10cm)

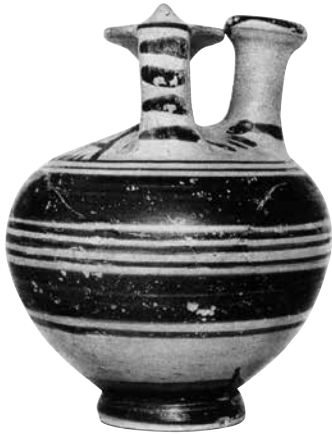


1.3 アンフォリスコス (10.4cm)



1.4 鍙壺 (15.9cm)

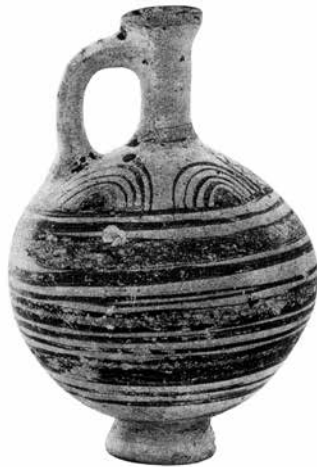
図1 亜ミケーネ期の土器 (括弧内の数字は高さ)



1.5 鈴壺 (14.7cm)



1.6 レキュトス (16.4cm)



1.7 レキュトス (13.8cm)

図1 垂ミケーネ期の土器 (括弧内の数字は高さ)

②原幾何学文様期

原幾何学文様期はギリシア世界において本格的な鉄の使用が開始された時期に当たり、初期鉄器時代でも前半期を指す。新しい金属器の普及のみならず、以下に記す通り、土器に関しても大きな変化を経験した時期に当たる。

アテネのこの時期の土器の器形は、アンフォラ（図2.1、2.2）、カップ、スキュフォス（円錐形の脚部の上に、取っ手が二つある小型の鉢が取り付けられた土器、図2.3、2.4）、レキュトス（図2.5、2.6）、ピュクシス（蓋がある小型の容器）など、幾つもの種類が存在する⁹²。亜ミケーネ期に見られたような不整形な作りのものは姿を消し、技術が向上したことをうかがわせている。

上記の内アンフォラは、亜ミケーネ期に既に存在した器形ではあるが、原幾何学文様期になると火葬用の骨壺という新たな用途が加わった。アテネではこの時期に火葬が導入され、茶毘に付した遺骨をアンフォラに入れて墓壙に埋納する習慣が一般化した。これは他の用途での使用がなかったことを意味するわけではないが、墓から骨壺として利用されたアンフォラが多数出土していることは事実である。そしてそれらの豊富な出土例があることから、当該期の土器研究において中心的な役割を担ってきた。

アンフォラには二つ取っ手があるが、その付き方によって下記の四つに分類されている⁹³。

No. 1 : 肩から頸部にかけて垂直の取っ手があるタイプ（図2.1）

(neck-handled amphora)

No. 2 : 胴部に水平の取っ手があるタイプ（図2.2）

(belly-handled amphora)

No. 3 : 肩に縦方向の取っ手があるタイプ

(shoulder-handled amphora)

No. 4 : 肩から口縁部にかけて垂直の取っ手があるタイプ

(amphora with handles from shoulder to lip)

上記四種類の内、最初の二つが最もよく見受けられるタイプである。そしてそれら二種類に関しては、No. 1の肩から頸部にかけて垂直の取っ手があるアンフォラは男性用の骨壺であり、一方でNo. 2の胴部に水平の取っ手があるアンフォラは女性用の骨壺であるという見解が提出されているが⁹⁴、この意見に対しては異論があることも押さえておく必要があろう⁹⁵。No. 3の肩に取っ手があるタイプは原幾何学文様期でも後期になってから登場するもので、またNo. 4はあまり資料数が多くない。



2.1 アンフォラ (43.5cm)



2.2 アンフォラ (39.9cm)



2.3 スキュフォス (16.6cm)

図2 原幾何学文様期の土器（括弧内の数字は高さ）



2.4 スキュフォス (16cm)



2.5 レキュトス (14cm)



2.6 レキュトス (15cm)

図2 原幾何学文様期の土器 (括弧内の数字は高さ)

他方文様に関しては、馬が描かれているアンフォラも発見されているが例外的な存在であり⁹⁶、亜ミケーネ期同様に同心（半）円や直線、曲線、格子模様などが中心である。そして原幾何学文様期における最大の特徴は、同心（半）円を描くためのコンパスが導入されたことであろう。コンパスの使用という革新的な技術の向上により、フリーハンドで（半）円が描かれていた亜ミケーネ期と比べると、原幾何学文様期の土器は精巧なイメージの図柄となっている。このコンパスに関しては実験考古学に基づく復元が発表されており、動物や人間の毛がブラシとして使われていたことが推測されている⁹⁷。

小型の土器の場合は比較的早くから表面の大部分が塗りつぶされていることもあるが、大型の土器に関しては後期になるまでは広い範囲が塗りつぶされることはあまりなく、幾何学的な図柄が点在するように描かれていることが多い。また波線の描き方や土器全体の図柄の構成など、文様全般に関して原幾何学文様期のものは均整がとれて洗練された雰囲気のものが多い。

③初期幾何学文様期

一般にアテネの初期幾何学文様期は、コールドストリームの研究を基に⁹⁸、IとIIに細分化されている（以下、EGIとEGIIと略記）。この時期の著名な遺構としては、たとえば骨壺のアンフォラ（図3.1）に剣が巻き付けられていた「戦士の墓」がある⁹⁹。以下、器形、文様の順に、初期幾何学文様期の土器について記していこう。

器形に関しては、EGIの間は原幾何学文様期から受け継いだ要素が強いが、カンタロス（垂直の取っ手が二つ付いた小型の土器、図3.2）が普及するなど新しい傾向も見受けられる¹⁰⁰。また幾何学文様期を通して製作されるピュクシス（蓋つきの容器）に関しては、初期幾何学文様期は胴部が球状のタイプや尖底のタイプなどが存在する（図3.3、3.4）。

EGIIになると、幅の広い底部を持つオイノコエ（取っ手が一つあり、口縁部が三葉の土器、図3.5）や高さが低いスキュフォス（水平の取っ手が二つ付いた小型の土器、図3.6）など、その後幾何学文様期において長期にわたって好まれる特徴的な土器が豊富に出土するようになる¹⁰¹。またEGIIのカンタロスは、スキュフォスの影響を受けたのか、EGIに比べて高さが低くなる（図3.7）¹⁰²。

ところで初期幾何学文様期も埋葬方法は火葬であり、原幾何学文様期同様にアンフォラ（図3.8、3.9）が骨壺として用いられた。とりわけ胴部から頸部にかけて取っ手があるアンフォラ（図3.9）に関して顕著に把握できることである

が、この時期の土器の胴部の最大径は、おそらく技術力の向上に伴い、原幾何学文様期のものよりも高い位置にくることが多く、全体が細くなる傾向が見受けられる。

一方文様に関しては、土器全体が黒く塗りつぶされるようになったことが最大かつ劇的な変化であろう。そのため図柄は、長方形や台形状のパネルや帯状のスペースなど、塗りつぶされずに残された場所に描かれるようになる。そして明記すべきことに、原幾何学文様期には多用された同心（半）円が衰退した¹⁰³。アテネには複数の土器の工房が存在したと推察されるが、このように一斉にその特徴が変化することは初期鉄器時代の間にはしばしば発生することであり、この時代のアテネにおける土器生産の在り方を検討する上で重要な手がかりの一つであると言えるかもしれない¹⁰⁴。

初期幾何学文様期に特徴的な模様は、胸壁（battlement）模様と雷文（meander）であろう。胸壁模様というのは、城や城壁に設けられた攻撃や防衛のための凹凸の形状に似た図柄のことである（図3.1、3.2、3.3、3.4、3.8、3.9）。とりわけEGIの土器にはこの模様が多用されており、パネルの中にも帯状スペースにも描かれている。EGIIになると胸壁模様よりも雷文の方が好まれるようになり、かかる傾向が次の中期幾何学文様期にも受け継がれていく¹⁰⁵。

これら二つ以外にも、直線やジグザグ模様などの幾何学的な図柄が用いられた。また例外的な存在ではあるが、原幾何学文様期同様に、馬が描かれた土器も発見されていることを付け加えておきたい¹⁰⁶。

初期幾何学文様期の最終末期の著名な遺構として、穀倉を模した土製品が出土したことで知られる「富裕なアテネ婦人の墓」がある¹⁰⁷。この墓から出土したアンフォラは、器形および文様の双方において中期幾何学文様期への移行をうかがわせる特徴を有している（図3.10）。



3.1 アンフォラ (52cm)



3.2 カンタロス (9.9cm)



3.3 ピュクシス
(蓋をはずした高さ：11cm)



3.4 ピュクシス
(蓋をはずした高さ：14.4cm)

図3 初期幾何学文様期の土器 (括弧内の数字は高さ)



3.5 オイノコエ (23.7cm)



3.6 スキュフォス (6cm)



3.7 カンタロス (8cm)



3.8 アンフォラ (40cm)

図3 初期幾何学文様期の土器 (括弧内の数字は高さ)



3.9 アンフォラ (72.2cm)



3.10 アンフォラ (71.5cm)

図3 初期幾何学文様期の土器 (括弧内の数字は高さ)

④中期幾何学文様期

中期幾何学文様期の土器は、文字通り初期幾何学文様期と後期幾何学文様期との中間的な特徴を有している。また一般に、IとIIの二つの時期に区分されている（MGIとMGIIと略記）¹⁰⁸。

器形についてであるが、まず大型の土器としてはアンフォラが言及されよう。この時期もまだ火葬が行われており、骨壺として使用された。種類に関しては、肩から頸部にかけて垂直の取っ手があるタイプ、胴部に水平の取っ手があるタイプ、さらに肩に縦方向の取っ手があるタイプの三つが知られている¹⁰⁹。肩に取っ手があるタイプは、初期幾何学文様期と比べると、頸部が発展して長くなるという特徴が見受けられる（図4.1）¹¹⁰。

また大型の土器としては、高い脚部を持つクラテル（大きめの鉢で、一般に取っ手は二つ、図4.2）も注目されよう。この器形は次の後期幾何学文様期になると、さらに大型化したものが登場する¹¹¹。

一方小型の土器の中では、ピュクスに大きな変化が起きる。MGIになると胴部が球形の従来のタイプから底部が平らな器形へと移行し、さらにMGIIになると蓋に馬の小像が施されるものが出現する（図4.3）。上記のクラテル同様に、この器形も後期幾何学文様期へと受け継がれ、より発展していくこととなる¹¹²。

他の小型土器の類では、スキュフォスが重要であろう（図4.4）。またカンタロスに関しては、MGIIになると取っ手が高い位置までくる新しいタイプが登場する（図4.5）¹¹³。

一方文様に関しては初期幾何学文様期の傾向、すなわち土器の表面全体が塗られ、パネルや帯状のスペースに図柄を配置する手法が、そのまま踏襲されている。ただし、初期幾何学文様期に比べて図柄の割合が多くなっている点、この時期に見受けられる変化である。

またとりわけMGIIになると、馬や鳥など、徐々に図像的表現が増加していく。後期幾何学文様期のように多用されることはないが、しかしそれでも、幾何学文様だけに固執した時期を既に脱しつつあることをうかがわせている¹¹⁴。



4.1 アンフォラ（蓋をはずした高さ：51.5cm）



4.2 クラテル（52.5cm）

図4 中期幾何学文様期の土器（括弧内の数字は高さ）



4.3 ピュクシス
(蓋をはずした高さ：10.5cm)



4.4 スキュフォス (6.9cm)



4.5 カンタロス
(器本体の口縁部までの高さ：11.5cm)

図4 中期幾何学文様期の土器 (括弧内の数字は高さ)

⑤後期幾何学文様期

後期幾何学文様期になると土器の表面全体が幾何学文様や図像で埋め尽くされるようになり、それまでのようにパネルや帯状のスペースを設けて模様を描くという手法から大きな変化が生じた。また図像表現が豊富になり、その描写方法などから製作者（集団）を見分ける研究もなされている¹¹⁵。さらにアテネの埋葬習慣においては数百年ぶりに土葬が復活したため¹¹⁶、火葬用の骨壺が必要なくなった。

後期幾何学文様期はⅠとⅡに区分されているが（LGIとLGIIと略記）、以下、それぞれについて記していこう。

1. 後期幾何学文様期Ⅰ期（LGI）¹¹⁷

後期幾何学文様期Ⅰ期は、幾何学文様が質量ともに頂点を極めたと同時に、図像表現も急増した時期に当たる。精緻を極めた幾何学文様が土器の表面全体を覆う一方で、鳥や動物、通夜と推測される光景、馬に引かれた戦車に人間が乗っている図柄（図5.1.1）など、図像も大幅に増加した。

LGIに関して何よりも記さなければならないことは、通称「ディピュロンの名工（Dipylon Master）」と呼ばれている土器製作者の登場である。ディピュロンというのは古典期に建造されたケラメイコスの市門の名前で、その周辺から発掘された初期鉄器時代の土器がかかる名称の由来となった。この「ディピュロンの名工」こそが後期幾何学文様期における土器の様式を作り上げたと言われる人物であり¹¹⁸、何よりも墓の記念碑として使用された大型の土器で知られている¹¹⁹。その器形はアンフォラや高い脚を持つクラテルなど以前から存在するものではあるが、大型化されたことが大きな特徴である。

とりわけ著名な土器はアテネの国立博物館に所蔵されている胴部に水平の取っ手があるアンフォラで、高さが1 m55cmもある（図5.1.2）。これだけの大きさの土器を製作するには、相当の技術力が必要であろう。模様に関しては、胴部上方に横長のパネルが設けられており、おそらく通夜と思われる場面が描かれている。中央のテーブルに亡骸が横たえられ、それを囲むように頭に手を当てて死を悼む人たちが配されている。頸部にも図像表現が施されており、動物が二か所において帯状に描かれている。それ以外は、底部付近のわずかなスペースを除いて、ほとんどが雷文などの幾何学文様で埋めつくされている。初期鉄器時代のみならず、古代ギリシアを代表する傑作として世界的に名高い土器である。

LGI期には「ディピュロンの名工」と近い傾向を持つ土器の製作者が存在したことが、確認されている¹²⁰。それらすべてをまとめて「ディピュロンの工房 (workshop)」という表現が使用されることもある¹²¹。



5.1.1 クラテル (1m23cm)

図5.1 後期幾何学文様期Ⅰ期 (括弧内の数字は高さ)



5.1.2 アンフォラ (1m55cm)

図5.1 後期幾何学文様期Ⅰ期 (括弧内の数字は高さ)

2. 後期幾何学文様期Ⅱ期 (LGII)¹²²

LGIIを通して見受けられる最大の特徴は、幾何学文様が徐々に衰退していったことであろう。まだ多用されているが、LGIに頂点を極めた頃に比べると、既にその陰が見え始めている。逆に図像表現の方はLGIよりも大きなスペースを確保するようになり、幾何学文様期の終焉に近いことを感じさせる傾向が顕著となってくる。

またLGIに比べると文様の多様化が進んだことも、大きな特徴である。同一ないしは類似する傾向を持つ製作者の土器が一つにまとめられて工房(workshop)と呼ばれることが多く、それぞれに名称が付されている。たとえば「鳥の餌工房 (Birdseed Workshop)」は、鳥のモチーフに固有の表現方法がある。LGの土器に水鳥のようなくちばしの大きい鳥が描写されることは多々あるが、「鳥の餌工房」の場合は一列に並んだ鳥と鳥の間に、点々が付け加えられていることが特徴である。鳥のあごの下あたりから隣りの鳥の方向へと点が並んでおり、さらに胴体の下にも別の点の列が加えられていることがある(図5.2.1)¹²³。

これ以外にも、たとえば座った人物が子供用玩具のがらがらのようなものを持っているモチーフが特徴的な「がらがらグループ (Rattle Group)」など(図5.2.2)、幾つもの分類分けがなされている¹²⁴。このように個性のある文様の土器が製作されるようになり、それ以前に比べると多様性が強まったことがLGIIの特徴である。

器形についても言及しておく、大型のものとしては、肩から頸部にかけて垂直の取っ手があるアンフォラ(図5.2.3)やピッチャー(取っ手が一つついた水差し状の土器、図5.2.4)が多く発見されている。ただし、「ディピュロンの名工」のアンフォラ(図5.1.2)に代表されるようなLGIの大型土器に匹敵するほど大きなものは、姿を消した。

大型以外の器形としては、カンタロスやスキュフォスなどが知られている。また中期幾何学文様期の間に蓋に馬の像が裝飾されるようになったピュクシスは、馬の数が増加されるなど、より発展した形態を取るようになる(図5.2.5)。さらに、コリントスからの影響を受けて、コテュレ(水平の取っ手が二つある鉢、図5.2.6)が登場した¹²⁵。

このLGIIを以てして幾何学文様期は終焉を迎えたと同時に、初期鉄器時代もまた幕をおろした。幾何学文様の発展とその衰退、図像表現の消滅と再登場、

これら二つがアテネにおけるこの時代の土器の変遷を物語る重要な要素である。
ところで初期鉄器時代のギリシア各地においては、それぞれ地域性のある土器が製作された。それらに関しては、また別稿にて紹介していきたい。



5.2.1 スキュフォス (8.7cm)



5.2.2 鉢 (high-rimmed bowl、9.2cm)

図5.2 後期幾何学文様期Ⅱ期 (括弧内の数字は高さ)



5.2.3 アンフォラ (67.6cm)



5.2.4 ピッチャー (58cm)



5.2.5 ピュクシス
(器本体：8.1cm、蓋：14.2cm)



5.2.6 コテュレ (8cm)

図5.2 後期幾何学文様期Ⅱ期 (括弧内の数字は高さ)

おわりに

本稿においては、まず初期鉄器時代に関する時代名称の歴史を概観し、そのあとアテネの土器に関する基礎的な編年区分についてごく簡潔に紹介してきた。ダイナミックな時代の流れを描くような業績を求める読者には、退屈な内容であろう。しかし基礎がしっかりしていなければ、どのような手法の研究を手がけても成功しない。そして、それこそが我が国において当該期の研究が未だに進展しない最大の理由であろう。

とりわけ土器は、先にも記した通り、資料の年代決定に重要な役割を果たす。土器の編年体系に関する知識を得たところで当時の社会について何かがわかるわけではない、という批判もなされるが、土器に関する基礎知識がなければ時系列順に資料掌握をすることさえできないことが多い。繰り返し記すが、初期鉄器時代研究における欧米先進国の場合にはどのような傾向の業績であってもしっかりした基礎知識に基づく分析がなされていることが多いが、本邦においてはかかる事柄が蔑ろ（もしくは無視）されていると言わざるを得ない状況にある。

本稿冒頭にて言及した特別展「古代ギリシャー時空を超えた旅」にて図らずも露呈されたように、我が国における初期鉄器時代研究は未だに「暗黒時代」である。無論、筆者自身もまだ浅学の身である。一日も早くそこから脱却できるよう、研究の進展を期すこととしたい。

- 1 ここでは筆者が気がついた事柄の内、特別展の図録に記載されていることを対象として記していきたい。展示パネルの記載に関しても疑問を感じる事柄があったが、それらに関しては見学中に急いで書いたメモしか残っていないので、ここでは省くこととする。
- 2 東京国立博物館等編集『古代ギリシャー時空を超えた旅：展覧会図録』、芳賀京子監修、2016（以下、『図録』）、366。
- 3 展示品の解説でも「亜ミュケナイ時代」と、時代名称としての記載がある（『図録』108-111, No.87-90）。ただし別の箇所では「亜ミュケナイ様式」と土器の編年区分として記載されており、意見が統一されていない（『図録』141）。
- 4 『図録』142。
- 5 Kotsonas 2016, 244, fig.1. ただし、(初期)鉄器時代がいつからいつまでかという点に関しては、各地域によって異なる。たとえば、ギリシアの中核地域との関係が近年さらに注目されているトラキアの初期鉄器時代は前6世紀まで含まれ、より長期の区分となる（cf. Bozhinova 2012, 51, 68, fig.2, 71, fig.6, Nekhrizov & Tzvetkova 2018）。
- 6 Morris 1997, 2000, 77-106. モリスは初期鉄器時代という名称に関して、暗黒時代という

言葉よりも“less judgmental”であるという表現をしている (Morris 2007, 211)。

- 7 Kotsonas 2016.
- 8 Kotsonas 2008.
- 9 Cf. Kotsonas 2016, 242.
- 10 Cf. Kotsonas 2016, 242.
- 11 Finley 1963, 16.
- 12 Simantoni-Bournia 1997, 23.
- 13 Morris 1997, 106-111, 2000, 84-88, cf. Kotsonas 2016, 241.
また本邦においても、この問題に関する業績が出された (藤縄謙三「ホメロスとミュケナイ時代—学説史の概観」『西洋史学』54, 1962, 45-58)。
- 14 Finley 1954, 43.
- 15 M.I.フィンリー『オデュッセウスの世界』下田立行訳、岩波文庫、1994、82、補遺I (277-309)。
- 16 Finley 1963, chap. 2, 'The Dark Age and the Homeric Poems', 19-28, 1981, 79. さらに、伝承やホメロスを含む叙事詩に関するフィンリーの業績として、Finley 1975, chap.1, 'Myth, Memory and History', esp.14-18.
- 17 太田秀通『共同体と英雄時代の理論』山川出版社、1959 (増補版、1967) (以下、書名のみ)。
- 18 「・・・ホメロスの社会とミュケナイ文明とのちがいは、ホメロスの叙事詩がポリスの形成ごろまで形成過程にあったという事情から説明できるものである」(『共同体と英雄時代の理論』増補版、94)。「ホメロスは、詩的空想がミュケナイ時代と前九、八世紀の状態とを、不可分に統一したものであるとされるが、この不可分のものを歴史的に分解することが可能である。・・・しかしホメロスにおける新古の層を判別する問題は決して終点に達してはいない」(『共同体と英雄時代の理論』増補版、142-143)。
- 19 ホメロスの描く世界がいつの時代かという問題を詳細に論じるには、別稿が必要である。ここでは、さしあたり、下記の文献を記すにとどめる。Cf. Morris 1986, Crielaard 1995, Morris & Powell eds. 1997, Mazarakis Ainian 2000, 13-18.
- 20 Snodgrass 1974. ただし、スノッドグラスは1980年出版の著作では、ホメロスの世界を暗黒時代に帰している (Snodgrass 1980, 35)。
- 21 Van Wees 1992, esp.263.
- 22 Snodgrass 1998.
- 23 たとえば、Crielaard ed. 1995, Carter & Morris eds. 1995. さらに、cf. Deger-Jalkotzy & Lemos eds. 2006.
- 24 Sherratt & Bennet eds. 2017.
- 25 Mazarakis Ainian 2017.
- 26 このテーマに関連する業績として、Morris 1997, 2000, chap.3, 77-106. さらに、cf. Kotsonas 2016, 245.
- 27 Kotsonas 2016, esp.242.
- 28 Kotsonas 2016, esp.246-247.
- 29 Starr 1961.
- 30 たとえば、初期鉄器時代の専門家であるJ.ウィットリが執筆した概説書の文献一覧には

- 記載がない (Whitley 2001, 469)。気が付いていないのではなく、取り上げなかったという方が適切であろう。またディキンソンの概説書の文献一覧にも含まれてはいない (Dickinson 2006, 282)。Cf. Muhly 2011, 46.
- 31 Muhly 2011, 46, Kotsonas 2016, 250. さらに、cf. Morris 1997, 120-121, 2000, 94-95.
- 32 Snodgrass 1971, Desborough 1972.
- 33 Coldstream 1977.
- 34 拙稿「鉄の時代へーギリシアの初期鉄器時代に関する研究動向」『西洋史研究』新輯第33号、2004 (以下、拙稿2004)、97を参照。
- 35 Cf. Morris 1997, 126-127, 2000, 98-99, Kotsonas 2016, 257- 258. さらにスノッドグラスに関しては、Morris 1994, 39-40, 2000, 65-66.
- 36 Papadopoulos 1993, 194. Cf. Kotosnas 2016, 251.
- 37 コツォナスの論文には、1967年から1974年にかけてギリシアを支配した軍事政権に対するスノッドグラスの応対が記されている。スノッドグラスの研究者としての姿勢や人となりをうかがわせる内容である (Kotsonas 2016, 255-257)。
- 38 Skeat 1934. スキートは鉄器時代と初期鉄器時代の両方の用語を用いており、後者に関してはたとえば15頁や19頁などに使用が確認される。
- 39 Kotsonas 2016, 246, fig.2.
- 40 Kotsonas 2016, 249.
- 41 Kotsonas 2016, 249. レフカンディの第一巻は、図版 (Plates) は1979年の出版であるが、本文 (Text) は翌1980年の刊行である (Popham & Sackett and, with Themelis eds. 1979 & 1980)。
- 42 レフカンディに関しては、拙稿「ギリシアにおける初期鉄器時代の遺跡 (2) レフカンディ」『史苑』第77巻第2号、2017、35-78 (以下、拙稿2017)。
- 43 Popham & Sackett and, with Themelis eds. 1979 & 1980, ix.
- 44 ケンタウロス像に関しては、報告書第一巻の出版に先立ち、既に1970年に論文が発表されていた (Desborough, Nicholls & Popham 1970)。またこの遺物に関して言及がある邦語文献として、拙稿2017、51-52。
- 45 Popham & Sackett 1968.
- 46 Cf. Hägg 1983, 7, Coulson 1986, 78. さらに、cf. Kotsonas 2016, 257.
- 47 Kotsonas 2016, 257.
- 48 Kotsonas 2016, 257.
- 49 Coulson 1990.
- 50 Whitley 1991.
- 51 Kotsonas 2016, 257.
- 52 一般向けの簡潔な概説の中で、レモスは暗黒時代 ('Dark Age') には後期幾何学文様期は含まれないと記している (Lemos 2006, 87)。暗黒時代の時期区分に関する諸家の意見に関しては、拙稿「初期鉄器時代におけるアテネとアッティカ」『史学雑誌』第110編第11号、2001 (以下、拙稿2001)、37、図表2。
- 53 Hall 2007.
- 54 Mazarakis Ainian ed. 2011.
- 55 Coulson 1990.

- 56 Cf. Kotsonas 2016, 262.
- 57 Langdon 2008. この著作に関しては、別稿にて書評および紹介したことがある。拙評「書評：S.Langdon, *Art and Identity in Dark Age Greece, 1100-700 B.C.E*」『古代文化』第64巻第4号、2013、153-155、拙稿「ギリシアの初期鉄器時代に関する調査および研究動向2010～2014年」『史苑』第76巻第2号、2016、31-32。
- 58 Langdon ed. 1993. ラングドンはこの特別展において、“the exhibition’s guest curator”であった (Langdon ed. 1993, xi)。
- 59 Langdon ed. 1997.
- 60 Langdon 2008, xviii.
- 61 Langdon 1989.
- 62 2018年11月8日に受信した私的通信による。その内容を本稿に含めることを認める旨も記されている。
- 63 Cf. Lemos 2002, 8-9, Kotsonas 2016, 258-259.
- 64 McDonald, Coulson & Rosser eds. 1983, 260-272 (埋葬資料), 9-60 (建築遺構)。
- 65 ニコリアの土器および編年体系に関しては、McDonald, Coulson & Rosser eds. 1983, 61-259.
- 66 概報として、McDonald 1972, McDonald et al. 1975.
- 67 Cf. Wilkie 2002, 103, Kotsonas 2016, 258.
- 68 コツォナスは、「とても奇妙な (very peculiar)」と記している (Kotsonas 2016, 258)。
- 69 クルソンの土器に関する業績として、Coulson 1985, 1986, 1988a, 1988b, 1991.
- 70 Cf. Lemos 2002, 8-9, Kotsonas 2016, 259.
- 71 Kotsonas 2016, 259.
- 72 初期鉄器時代の絶対年代に関する問題点については、Papadopoulos 2014 (2015), 184-185. 東地中海世界における後期青銅器時代の終焉の年代に関してはさらに、cf.Knapp & Manning 2016, esp.113-118.
- 73 初期鉄器時代でも後期になるとアルファベットが誕生し、多少の文字史料が存在する。ただし、土器に若干の文字が刻まれている程度であり、数値年代を検討するための手がかりとはならない。
- 74 たとえば、Desborough 1952, 294-295, Coldstream 1968, chap.13, 302-331, Yannai 1982.
- 75 James et al. 1991, James, Thorpe, Kokkinos, Morkot & Frankish 1992. Cf. Papadopoulos 2014 (2015), 184.
- 76 Newton, Wardle & Kuniholm 2003 (2005). ただし、この分析には批判が提出されている。Cf. Weninger & Jung 2009.
- 77 Toffolo et al. 2013.
- 78 Desborough 1952, Coldstream 1968. この点に関しては、既に別稿にて記載したことがある (拙稿2004、97)。
- 79 Rombos 1988.
- 80 Popham & Sackett and, with Themelis eds. 1979 & 1980, Popham, Calligas & Sackett eds. 1990 & 1993.
- 81 Kourou 1999.
- 82 Coldstream & Catling eds. 1996.

- 83 Papadopoulos 2005.
- 84 初期鉄器時代のアゴラに関する邦語文献として、拙稿「ギリシアにおける初期鉄器時代の遺跡（1）アテネのアゴラ」『史苑』第72巻第1号、2011、99-160（以下、拙稿2011）。
- 85 レフカンディに関するこの種の事例紹介として、拙稿2017、53。
- 86 拙稿2001、37-39。さらに、Mountjoy 1999、56-58。
- 87 Deger-Jalkotzy & Bächle eds. 2009. この論文集には青銅器時代終末期から初期鉄器時代への移行期に関する重要な業績が幾つも収められているが、ここでは各地域の亜ミケーネ期の編年を考える上で重要なものとして、下記のことを記しておきたい。Deger-Jalkotzy 2009, Demakopoulou 2009, Eder 2009, Moschos 2009, Ruppenstein 2009.
- 88 アテネの亜ミケーネ期に関する報告書として、たとえば、Ruppenstein 2007.
- 89 Cf. Mountjoy 1993, 114-117, 1999, 57, 625-635.
- 90 ただしアカイアやエウボイアでは、動物の凶柄が描かれた例もわずかながら発見されている。Cf. Crowel 2009, 44, 49.
- 91 Cf. Mountjoy 1993, 117, 1999, 57, 625-635.
- 92 Desborough 1952, chap.1, 1-126, Lemos 2002, 27-84.
- 93 Desborough 1952, 5, Lemos 2002, 56-63.
- 94 Desborough 1952, 5-6, 20.
- 95 Lemos 2002, 155.
- 96 Lemos 2002, pl.83.3.
- 97 Papadopoulos, Vedder & Schreiber 1998. さらに、cf. Boardman 1960, Eiteljorg 1980.
- 98 Coldstream 1968, 10-15, 1977, 26-35.
- 99 「戦士の墓」に関する邦語文献として、拙稿2011、105-107、143。
- 100 カンタロスは、原幾何学文様期の後期には登場している（Desborough 1952, 102, Coldstream 1968, 11）。
- 101 初期幾何学文様期の器形に関しては、Coldstream 1968, 11-12, 14-15, 1977, 26, 28.
- 102 Coldstream 1968, 14, 1977, 28.
- 103 コールドストリームは「拒否されている」と表現している（‘Circular ornament is now largely rejected’, Coldstream 1977, 26）。ただし、初期幾何学文様期に属する土器の中にも、同心円が描かれているものが存在する（Kourou 2001, 61, 66）。
- 104 もしかしたら初期鉄器時代におけるアテネの土器生産は、各工房において私的に行われていたのではなく、集落などの管理下に置かれていた可能性も推察されよう（拙稿「アテネのアゴラにおける初期鉄器時代」『かいほう』114、2012、4）。
- 105 Coldstream 1968, 12, 15, 19, 1977, 28.
- 106 Coldstream 1968, 13.
- 107 この墓に関する邦語文献として、拙稿2011、113、143。
- 108 Coldstream 1968, 16-28.
- 109 コールドストリームによればこの時期には三種類のタイプの火葬骨壺用アンフォラがあり、その内、肩から頸部にかけて垂直の取っ手があるタイプ（neck-handled amphora）は男性用で、胴部に水平の取っ手があるタイプ（belly-handled amphora）と肩に縦方向の取っ手があるタイプ（shoulder-handled amphora）は女性用であると言う（Coldstream 1977, 75）。

- 110 Coldstream 1968, 17.
- 111 Coldstream 1968, 17-18, 23, 1977, 75. 古典ギリシア語のクラーテルは、葡萄酒と水を混ぜるための容器（混酒器）を意味する。
- 112 Coldstream 1977, 73, 76-77.
- 113 スキュフォスおよびカンタロスに関しては、Coldstream 1968, 18, 23.
- 114 Coldstream 1968, 26-28, 1977, 77-78.
- 115 例えば、Cook 1947, Davison 1961, Brann 1962, esp.8-9, Coldstream 1968, 29-90.
- 116 Coldstream 1977, 119-123.
- 117 コールドストリームは後期幾何学文様期Ⅰ期をさらに二つ（LGIaとLGIb）に細分化している（Coldstream 1968, 29）。
- 118 Coldstream 1977, 110.
- 119 Coldstream 1968, 33.
- 120 Cf. Davison 1961, 28-35, Coldstream 1968, 29-41, 1977, 113.
- 121 Davison 1961, 22-35, 133-140, Coldstream 1968, 29-41. ただし、実際にそのような工房が存在したのか否かは不明である（cf. Coldstream 1968, 29, n.3）。
- 122 後期幾何学文様期Ⅱ期も一般に、二つに細分化されている（LGIa, LGIb）（Coldstream 1968, 53）。
- 123 Davison 1961, 55-62, Coldstream 1968, 67-70. コールドストリームによれば、このグループの土器製作は、後期幾何学文様期Ⅱa期が中心であった。
- 124 「がらがらグループ」に関しては、Cook 1946, Ahlberg 1967, Coldstream 1968, 71-72.
- 125 Coldstream 1968, 87, 1977, 117.

図版出典一覧

図1

- 1.1 Ruppenstein 2007, Taf.23, Gr.126/1.
- 1.2 Ruppenstein 2007, Taf.17, Gr.113/Inv.2161.
- 1.3 Ruppenstein 2007, Taf.17, Gr.113/Inv.2166.
- 1.4 Ruppenstein 2007, Taf.25, Gr.127/2.
- 1.5 Ruppenstein 2007, Taf.25, Gr.127/3.
- 1.6 Ruppenstein 2007, Taf.23, Gr.126/4.
- 1.7 Ruppenstein 2007, Taf.29, Gr.136/7.

図2

- 2.1 Schweitzer 1971, pl.5.
- 2.2 Lemos 2002, pl.86.2.
- 2.3 Schweitzer 1971, pl.1.
- 2.4 Schweitzer 1971, pl.2.
- 2.5 Lemos 2002, pl.34.6.
- 2.6 Lemos 2002, pl.35.8.

図 3

- 3.1 Whitley 1991, pl.23.
- 3.2 Coldstream 1977, 27, fig.1.b.
- 3.3 Coldstream 1977, 27, fig.1.c. (高さに関しては、cf.Coldstream 1968, ix, no.1h)
- 3.4 Coldstream 1977, 27, fig.1.d. (高さに関しては、cf.Coldstream 1968, ix, no.1f)
- 3.5 Coldstream 1977, 29, fig.2.b.
- 3.6 Coldstream 1977, 29, fig.2.c.
- 3.7 Coldstream 1977, 29, fig.2.d.
- 3.8 Coldstream 1977, 27, fig.1.e.
- 3.9 Coldstream 1977, 29, fig.2.a.
- 3.10 Whitley 1991, pl.20.

図 4

- 4.1 Coldstream 1977, 76, fig.23.a. (高さに関しては、cf.Coldstream 1968, xi, no.5g)
- 4.2 Schweitzer 1971, pl.15.
- 4.3 Coldstream 1977, 77, fig.24.a. (高さに関しては、cf.Coldstream 1968, x, no.4b)
- 4.4 Coldstream 1977, 76, fig.23.c.
- 4.5 Coldstream 1977, 76, fig.23.b. (高さに関しては、cf.Coldstream 1968, x, no.4d)

図 5. 1

- 5.1.1 Langdon ed. 1993, 86, fig.16.
- 5.1.2 Schweitzer 1971, pl.30.

図 5. 2

- 5.2.1 Davison 1961, fig.81.
- 5.2.2 Langdon ed. 1993, 92, no.21.
- 5.2.3 Langdon ed. 1993, 50, no.3.
- 5.2.4 Langdon ed. 1993, 203, no.79. (高さに関しては、cf.Davison 1961, 156, no.30)
- 5.2.5 Langdon ed. 1993, 108, no.29.
- 5.2.6 Coldstream 1968, pl.15.j.

文献一覧

- Ahlberg, G. 1967: A Late Geometric Grave-Scene Influenced by North Syrian Art, *Op.Ath.* 7, 177-186.
- Boardman, J. 1960: The Multiple Brush, *Antiquity* 34, 85-89.
- Bozhinova, E. 2012: Thrace between East and West: The Early Iron Age Cultures in Thrace, in A.Çilingiroğlu & A.Sagona eds., *Anatolian Iron Ages 7: The Proceedings of the Seventh Anatolian Iron Ages Colloquium held at Edirne, 19-24 April 2010*, Ancient Near Eastern Studies Supplement 39, Leuven, Paris & Walpole, 51-71.

- Brann, E.T.H. 1962: *The Athenian Agora VIII: Late Geometric and Protoattic Pottery—Mid 8th to Late 7th Century B.C.*, Princeton.
- Carter, J.B. & S.P.Morris eds. 1995: *The Ages of Homer: A Tribute to Emily Townsend Vermeule*, Austin.
- Coldstream, J.N. 1968: *Greek Geometric Pottery: A Survey of Ten Local Styles and their Chronology*, London (updated second edition, 2008).
- 1977: *Geometric Greece*, London (2nd edition, 2003, London & New York).
- Coldstream, J.N. & H.W.Catling eds. 1996: *Knossos North Cemetery: Early Greek Tombs*, British School at Athens, Supplementary Volume 28, 4 vols., London.
- Cook, J.M. 1946: A Geometric Graveside Scene, *BCH* 70, 97-101.
- 1947: Athenian Workshops around 700, *BSA* 42, 139-155.
- Coulson, W.D.E. 1985: The Dark Age Pottery of Sparta, *BSA* 80, 29-84.
- 1986: *The Dark Age Pottery of Messenia*, Göteborg.
- 1988a: Geometric Pottery from Volimidia, *AJA* 92, 53-74.
- 1988b: The Dark Age Pottery of Sparta, II: Vrondama, *BSA* 83, 21-24.
- 1990: *The Greek Dark Ages: A Review of the Evidence and Suggestions for Future Research*, Athens.
- 1991: The 'Protogeometric' from Polis Reconsidered, *BSA* 86, 43-64.
- Crielaard, J.P. 1995: Homer, History and Archaeology: Some Remarks on the Date of the Homeric World, in Crielaard ed. 1995, 201-288.
- Crielaard, J.P. ed. 1995: *Homeric Questions: Essays in Philology, Ancient History and Archaeology, including the Papers of a Conference Organized by the Netherlands Institute at Athens (15 May 1993)*, Amsterdam.
- Crouwel, J.H. 2009: Pictorial Pottery of the Latest Bronze Age and the Early Iron Age, in Deger-Jalkotzy & Bächle eds. 2009, 41-60.
- Davison, J.M. 1961: *Attic Geometric Workshops*, Yale Classical Studies 16 (reprint, Roma, 1968).
- Deger-Jalkotzy, S. 2009: From LHIIIC Late to the Early Iron Age: The Submycenaean Period at Elateia, in Deger-Jalkotzy & Bächle eds. 2009, 77-116.
- Deger-Jalkotzy, S. & A.E.Bächle eds. 2009: *LHIIIC Chronology and Synchronisms III: LHIIIC Late and the Transition to the Early Iron Age—Proceedings of the International Workshop held at the Austrian Academy of Sciences at Vienna, February 23rd and 24th, 2007*, Wien.
- Deger-Jalkotzy, S. & I.S.Lemos eds. 2006: *Ancient Greece: From the Mycenaean Palaces to the Age of Homer*, Edinburgh Leventis Studies 3, Edinburgh.
- Demakopoulou, K. 2009: Laconia in LHIIIC Late and Submycenaean: Evidence from Epidauros Limera, Pellana, the Amyklaion and Other Sites, in Deger-Jalkotzy & Bächle eds. 2009, 117-132.
- Desborough, V.R.d'A. 1952: *Protogeometric Pottery*, Oxford.
- 1972: *The Greek Dark Ages*, London.
- Desborough, V.R., R.V.Nicholls & M.Popham 1970: A Euboean Centaur, *BSA* 65, 21-30.

- Dickinson, O. 2006: *The Aegean from Bronze Age to Iron Age: Continuity and Change between the Twelfth and Eighth Centuries BC*, London & New York.
- Eder, B. 2009: The Late Bronze Age / Early Iron Age Transition in Western Greece: Submycenaean Studies, in Deger-Jalkotzy & Bächle eds. 2009, 133-149.
- Eiteljorg, H., II 1980: The Fast Wheel, the Multiple-Brush Compass and Athens as Home of the Protogeometric Style, *AJA* 84, 445-452.
- Finley, M.I. 1954, *The World of Odysseus* (reprint, Meridian Books, New York, 1959).
 ——— 1963: *The Ancient Greeks*, Chatto and Windus (reprint, Penguin Books, 1986).
 ——— 1975: *The Use and Abuse of History*, Chatto and Windus, London (reissued, the Hogarth Press, London 1986).
 ——— 1981: *Early Greece: The Bronze and Archaic Ages*, new and revised edition, New York & London.
- Hägg, R. 1983: Preface, in Hägg 1983 ed., 7-8.
- Hägg, R. ed. 1983: *The Greek Renaissance of the Eighth Century B.C.: Tradition and Innovation—Proceedings of the Second International Symposium at the Swedish Institute in Athens, 1-5 June, 1981*, Stockholm.
- Hall, J.M. 2007: *A History of the Archaic Greek World: ca.1200-479 BCE*, Malden, Oxford & Victoria.
- James, P. et al. 1991: *Centuries of Darkness: A Challenge to the Conventional Chronology of Old World Archaeology*, London.
- James, P., I.J.Thorpe, N.Kokkinos, R.Morkot & J.Frankish 1992: Centuries of Darkness: A Reply to Critics, *Cambridge Archaeological Journal* 2 (1), 127-130.
- Knapp, A.B. & S.W.Manning 2016: Crisis in Context: The End of the Late Bronze Age in the Eastern Mediterranean, *AJA* 120, 99-149.
- Kotsonas, A. 2008: *The Archaeology of Tomb AIKI of Orthi Petra in Eleutherna: The Early Iron Age Pottery*, Athens.
 ——— 2016: Politics of Periodization and the Archaeology of Early Greece, *AJA* 120, 239-270.
- Kourou, N. 1999: *Ανασκαφές Νάξου: Το Νότιο Νεκροταφείο της Νάξου κατά τη Γεωμετρική Περίοδο*, Athens.
 ——— 2001: An Attic Geometric Amphora from Argos: The Legacy of Protogeometric Style, in A.Alexandri & I.Leventi eds., *Καλλιόπεια: Μελέτες προς Τιμήν της Ολγας Τζάχου-Αλεξανδρή*, Athens, 51-68.
- Langdon, S. 1989: The Return of the Horse-Leader, *AJA* 93, 185-201.
 ——— 2008: *Art and Identity in Dark Age Greece, 1100 – 700 B.C.E.*, Cambridge University Press, Cambridge & New York.
- Langdon, S. ed. 1993: *From Pasture to Polis: Art in the Age of Homer*, University of Missouri Press, Columbia & London.
 ——— 1997: *New Light on a Dark Age: Exploring the Culture of Geometric Greece*, University of Missouri Press, Columbia & London.
- Lemos, I.S. 2002: *The Protogeometric Aegean: The Archaeology of the Late Eleventh and Tenth Centuries BC*, Oxford.

- 2006: The 'Dark Age' of Greece, in E.Bispham, T.Harrison & B.Sparkes eds., *The Edinburgh Companion to Ancient Greece and Rome*, Edinburgh, 2006, 87-91.
- Mazarakis Ainian, A. 2000: *Όμηρος και Αρχαιολογία*, Athens.
- 2017: Heroes in Early Iron Age Greece and the Homeric Epics, in Sherratt & Bennet eds. 2017, chap.7, 101-115.
- Mazarakis Ainian, A. ed. 2011: *The "Dark Ages" Revisited: Acts of an International Symposium in Memory of William D.E.Coulson: University of Thessaly, Volos, 14-17 June 2007*, University of Thessaly Press, Volos.
- McDonald, W.A. 1972: Excavations at Nichoria in Messenia: 1969-71, *Hesperia* 41, 218-273.
- McDonald, W.A., W.D.E.Coulson & J.Rosser eds. 1983: *Excavations at Nichoria in Southwest Greece III: Dark Age and Byzantine Occupation*, Minneapolis.
- McDonald, W.A. et al. 1975: Excavations at Nichoria in Messenia: 1972-1973, *Hesperia* 44, 69-141.
- Morris, I. 1986: The Use and Abuse of Homer, *Classical Antiquity* 5 (1), 81-138.
- 1994: Archaeologies of Greece, in Morris ed.1994, chap.2, 8-47.
- 1997: Periodization and the Heroes: Inventing a Dark Age, in M.Golden & P.Toohy eds., *Inventing Ancient Culture: Historicism, Periodization, and the Ancient World*, London & New York, chap.6, 96-131.
- 2000: *Archaeology as Cultural History: Words and Things in Iron Age Greece*, Malden & Oxford.
- 2007: Early Iron Age Greece, in W.Scheidel, I.Morris & R.Saller eds., *The Cambridge Economic History of the Greco-Roman World*, Cambridge, chap.8, 211-241.
- Morris, I. ed. 1994: *Classical Greece: Ancient Histories and Modern Archaeologies*, Cambridge.
- Morris, I. & B.Powell eds. 1997: *A New Companion to Homer*, Mnemosyne Supplementum, Leiden, New York & Köln.
- Moschos, I. 2009: Western Achaea during the Succeeding LHIIICLate Period—The Final Mycenaean Phase and the Submycenaean Period, in Deger-Jalkotzy & Bächle eds. 2009, 235-288.
- Mountjoy, P.A. 1993: *Mycenaean Pottery: An Introduction*, Oxford.
- 1999: *Regional Mycenaean Decorated Pottery*, Rahden.
- Muhly, J. 2011: Archaic and Classical Greece would not have been the Same without the Dark Ages, in Mazarakis Ainian ed. 2011, 45-53.
- Nekhrizov, G. & J.Tzvetkova 2018: Contributions to the Periodization and Absolute Chronology of the Early Iron Age in South Trace, *Archaeologia Bulgarica* 22 (1), 17-44.
- Newton, M., K.A.Wardle & P.I.Kuniholm 2003 (2005): Dendrochronology and Radiocarbon Determinations from Assiros and the Beginning of the Greek Iron Age, *Archaiologikon Ergon Makedonias kai Thrakis* 17, 173-190.
- Papadopoulos, J.K. 1993: To Kill a Cemetery: The Athenian Kerameikos and the Early Iron Age in the Aegean, *Journal of Mediterranean Archaeology* 6/2, 175-206.

- 2005: *The Early Iron Age Cemetery at Torone: Excavations Conducted by the Australian Archaeological Institute at Athens in Collaboration with the Athens Archaeological Society*, Monumenta Archaeologica 24, Los Angeles.
- 2014 (2015): Greece in the Early Iron Age: Mobility, Commodities, Politics, and Literacy, in B.Knapp & P.van Dommelen eds., *The Cambridge Prehistory of the Bronze and Iron Age Mediterranean*, Cambridge, Online Publication: 2014, Print Publication: 2015, chap.10, 178-195.
- Papadopoulos, J.K., J.F.Vedder & T.Schreiber 1998: Drawing Circles: Experimental Archaeology and the Pivoted Multiple Brush, *AJA* 102, 507-529.
- Popham, M.R., P.G.Calligas & L.H.Sackett eds. 1990 & 1993: *Lefkandi II: The Protogeometric Building at Toumba*, Part 1: The Pottery, 1990, Part 2: The Excavation, Architecture and Finds, 1993, Oxford.
- Popham, M.R. & L.H.Sackett eds. 1968: *Excavations at Lefkandi, Euboea 1964-66*, The British School of Archaeology at Athens.
- Popham, M.R. & L.H.Sackett and, with P.G.Themelis eds. 1979 & 1980: *Lefkandi I: The Iron Age—The Settlement, The Cemeteries*, Plates: 1979, Text: 1980, The British School of Archaeology at Athens, Supplementary volume 11, Oxford.
- Rombos, T. 1988: *The Iconography of Attic Late Geometric II Pottery*, Jonsered.
- Ruppenstein, F. 2007: *Kerameikos: Ergebnisse der Ausgrabungen 18—Die Submykenische Nekropole: Neufunde und Neubewertung*, München.
- 2009: The Transitional Phase from Submycenaean to Protogeometric: Definition and Comparative Chronology, in Deger-Jalkotzy & Bächle eds. 2009, 327-343.
- Schweitzer, B. 1971: *Greek Geometric Art*, translated by P. & C.Usborne, London & New York.
- Sherratt, S. & J.Bennet eds. 2017: *Archaeology and Homeric Epic*, Sheffield Studies in Aegean Archaeology, Oxford & Philadelphia.
- Simantoni-Bournia, E., 1997: *Αρχαιολογία των Πρώιμων Ελληνικών Χρόνων: Οι Αιώνες της Διαμόρφωσης (1050-600 π.Χ.)*, Athens.
- Skeat, T.C. 1934: *The Dorians in Archaeology*, London.
- Snodgrass, A.M. 1971: *The Dark Age of Greece*, Edinburgh.
- 1974: An Historical Homeric Society?, *JHS* 94, 114-125.
- 1980: *Archaic Greece: The Age of Experiment*, Berkeley & Los Angeles.
- 1998: *Homer and the Artists: Text and Picture in Early Greek Art*, Cambridge.
- Starr, C.G. 1961: *The Origins of Greek Civilization: 1100-650 B.C.*, New York (reprint, New York & London, 1991).
- Toffolo, M.B. et al. 2013: Towards an Absolute Chronology for the Aegean Iron Age: New Radiocarbon Dates from Lefkandi, Kalapodi and Corinth, *Plos One* 8 (12), 1-11.
- Van Wees, H. 1992: *Status Warriors: War, Violence and Society in Homer and History*, Amsterdam.
- Weninger, B. & R.Jung 2009: Absolute Chronology of the End of the Aegean Bronze Age, in Deger-Jalkotzy & Bächle eds. 2009, 373-416.

Whitley, J. 1991: *Style and Society in Dark Age Greece: The Changing Face of a Pre-literate Society 1100-700 BC*, Cambridge.

——— 2001: *The Archaeology of Ancient Greece*, Cambridge.

Wilkie, N.C. 2002: William Donald Edward Coulson, 1942-2001, *AJA* 106, 103-105.

Yannai, A. 1982: Raising the Dates of Greek Protogeometric?, *AJA* 86, 292.